

栗木京子『しらまゆみ』を読む

わたしは毎日のように短いエッセイを書いたり、やや長目の評論を書いたりしています。そして、その間に短歌を作ります。すると短歌が五・七・五・七・七の音数を持った最短のエッセイみたいになることがあります。見方を変えれば、二〇〇字ぐらいの短いエッセイは、長目の短歌、あるいは連作短歌かもしれないと思うこともあります。短歌が口語化すると、よけいこの感じは強まるともいえましょう。

栗木京子さんの『しらまゆみ』（二〇一〇年六月刊）を読んでいましたら「折口信夫父子の墓を訪ねて能登へ」という詞書のあとに十一首の歌がありまして、旅行記の短歌化かとも思えました。つまり散文（詩ではない、文章）が先にあつて、その所要所要を短歌にしていったという風にも読めたのです（折口信夫は釈道空という筆名をもつ詩人、歌人で「子」というのは折口春洋（養子）で春洋は昭和二十年硫黄島で戦死しました）。

葱を植ゑあさがほ咲かせる家見つつ墓所に来たりぬ若葉の丘の
というのが、書き出しの一行。季節と共に能登半島の囁目詠ともな

つています。

苦しみて苦しみて死にし丈夫まぢらと父に手向けむ冷えたるビール
「丈夫と父」はカッコに入れた方がいいぐらいで折口春洋とその養父道空を指しています。この父子の複雑な関係については研究書もあり、ある意味で有名ですがここでは略します。

死にゆく戦闘機とほく見送りし木蓮の花ありにきむかし
栗木さんはいまでもなく女性で一九五四年生まれですから直接の戦争体験はないのですが、社会的関心は深い歌人でこれまでも社会詠や時事詠のすぐれた作品をいくつも発表して来られました。

街川に沿ひて祭りの列すすむ兵士を送る列ならなくに
それにしても栗木さんが「戦闘機」とか「兵士」に執着していること、また折口父子の男対男の恋愛感情をあつさり受け入れておられるのは、さりげなく歌っているだけに不思議です。あるいはこのあたりに栗木京子という（例えば河野裕子さんとは対照的）すぐれた歌人の本質にかかわる謎（本人も気づかぬ特質）があるのかもしれません。



折りあげしのちの指の触れしもの思はるるかな古りし千羽鶴

しろき風曳きつつ紋白蝶飛び深き海より上がり来しこと

ほつれ毛を撫でつけ丸き夕日なり五月の能登の海へと沈む

どの歌も感性の鋭さを示したよい歌ですが、「千羽鶴」には願いがこめられるのが常、そして折るのは大方女性でしょう。「ほつれ毛を撫でつけ」という喩えで歌われる「丸き夕日」もそうですが手や指の触覚というもつとも官能的な感覚が歌われています。「紋白蝶」の歌では「しろき風曳きつつ」という表現がすぐれており、蝶はまるで海の精霊のようです。折口民俗学とか連想しなくなりません。

肩で息してゐるとき藍の壺置かれてありぬ海辺の宿に

妹のゐたならやはり薄き乳房持ちてをらむと湯より上がりぬ

遠駆けをして来し馬のかたはらにゐるとき夜よ海鳴りを聞く

南島の蜚にあらぬわれなれば北越の海見つ帰らな

ここまでの十一首が能登行き連作のようですが、実はこの一連は「遠駆け」という三十首の中に含まれていることを忘れてはならないのです。「遠駆け」というタイトルは能登に泊まった夜の歌から来ています。「肩で息してゐる」という表現と同じく、なにか人間の身体の動作（「馬」ではなく、「藍の壺」でもなく人間のそれ）を思い出させます。「乳房」の歌はいうまでもなく、折口父子の墓参という旅行譚のなかにこうしたいいくつもの身体感覚を入れているのが不思議な味わいを生んでいます。もしこれがエッセイの短歌化だとすれば作者はなにを語りたかったのかと、つい深読みさせられます。

参考のために「遠駆け」の中には、

その人は長き廊下のある家に育ちたるゆゑ嘘が下手なり

風呂敷の結び目キユツとつくるとき前半生を捨つる気のせり

いろいろな負け方重ねゆくことが大事と海の花火のあがる

のような人生を考えさせ、生き方を自問自答しているような歌があることを指摘しておきましょう。

栗木さんの最近の著書に「短歌をつくろう」（岩波ジュニア新書）というおもしろい入門書があります。散文と短歌という話のしめくくりとして、この本から引用します。「物語を短歌に翻訳する」という、そのものズバリのタイトルの一章があり「桃太郎」（昔話）の翻訳の例をあげています。

その昔どこかの村にいたそんな働き者のじいさんばあさん

おじいさん柴を刈るため今朝もまた鎌をかついで山へ行ったよ

おばあさん今日は天気がいいからと川へ行ったよ洗濯をしに

鎌は「かつぐ」かどうか問題でしょうが、物語の散文を短歌に変えるためには、余分なことは入れなければならず工夫がいりません。平素、推敲を重ねるくせができていないと成功しません。いずれにせよ、エッセイや旅行記も、短歌に翻訳できることを暗々裡にみとめているから、こういう入門書が書けるのでしょう。そのときにどこがどう変るとうまく翻訳できるのか。そこが問題です。栗木さんはこの本で「吾輩は猫である」や料理のレシピまで短歌化をこころみていますから、参考になります。

（※折口信夫については最近岩波文庫で『釈道空歌集』（折口信夫作、富岡多恵子編）が出ました）